



Caritas Kaleidoscope

カリタス女子短期大学

英語・英語圏文化専攻

Vol. 23

Summer Vacation 2006

英語・英語圏文化専攻 教員

パトリシア・保田

Summer School in Chichester Reika Noguchi

This summer, I studied English in Chichester College in the UK. I had a good time because I met people from many countries. I made friends from Spain, France, Germany, Italy, Latvia and Taiwan. I studied English with them. I was not good at speaking, so it was hard. But my friends helped me. As a result, I think my English is better than before. And I could learn about different cultures. For example, my Spanish friends invited me to their house; they made Spanish omelet. It was very tasty! And one day, a party was held in our college. My friends taught me a dance. I really enjoyed it!! When they returned to their countries, I was so sad. But I promised to go to their countries to meet them. They invited me to their homes! Before I come back to Japan, I'd like to go to see them! I can't forget this summer.

A Trip to China Shiho Oguchi

I went to China this summer for five days with a Chinese friend I met at Caritas. She returned home for summer vacation so I went with her. It was my first time to visit China. We arrived at Dalian airport and went to a hotel nearby. Next day, we went to Dandong near North Korea because Dandong is her home town. It took about five hours by taxi! I had a good time in China. Her family and friends were very kind. Also, prices in China were very cheap so I could buy many souvenirs. But there were a lot of inconveniences, too. For example, bathrooms, water, food, hygiene and traffic rules. It was amazing, I noticed a big difference between the rich and the poor. I was very sad to see child beggars for the first time but, overall, I had a great experience.

This summer, several of our students were able to travel abroad. Here are the reports of their trips.

A Trip to Italy Saki Susuda

This summer I went to Italy with my family for about three weeks. It was my first time there and I enjoyed it very much. In Alberobello, I saw a lot of houses called "trulli" with triangular roofs shown in the picture. We stayed at the "trulli" and experienced the local people's life. In Venice, the taxis are also on the canal, so they are not cars but boats. I saw gondolas too, but they were too expensive to try. In Italy, there are many world heritage sites, so I was impressed.

Summer in Vancouver Jacelyne Karino

In August, I went to Vancouver, Canada to visit my aunt and uncle. I was fascinated by the beauty of Vancouver. We went to Stanley National Park which is Vancouver's first park. The place is an evergreen oasis of 400 hectares. It is such a beautiful place like nothing I have seen before: Big tall trees, a river, and falls. After that we visited a place called *Storyeum*. It has a strange name but is a very exciting place. *Storyeum* brings the history of Vancouver and British Columbia to life with amazing sets. It was nice to know the hidden part of Vancouver. I was deeply touched. *Storyeum* made my visit to Vancouver even more special.



Reika in Chichester



Shiho in China



Saki in Italy



Jacelyne in Canada



アルフレッド・テニソン



トリニティ・カレッジ



アルフレッド・テニソン (Alfred Tennyson, 1809-1892) は、イギリスのヴィクトリア時代の代表的詩人です。彼は 1809 年にリンカンシャー州 (Lincolnshire) のサマーズビー (Somersby) で牧師の子として生まれました。州都リンカン (Lincoln) にはリンカン大聖堂 (Lincoln Cathedral) があり、大聖堂の前には、テニソンの大きな像があります。リンカンにあるアッシャー・ギャラリー (Usher Gallery) の展示室では、彼の肖像画、原稿、手紙などを見ることができます。私がリンカンを訪れたのは、1997 年の 3 月でした。

1828 年にテニソンは、ケンブリッジシャー州 (Cambridgeshire) の州都ケンブリッジにあるケンブリッジ大学 (University of Cambridge) のトリニティ・カレッジ (Trinity College) に入学します。ここで彼はアーサー・ハラム (Arthur Hallam, 1811-1833) と出会い、大きな影響を受けることになりました。学生時代のテニソンはまじめな優等生でしたが、1831 年に父親の看病のためにサマーズビーに帰ることになり、学位を取らずに大学を去りました。しかし、トリニティ・カレッジの図書館には、テニソンを記念する胸像があり、原稿もあります。私がケンブリッジを訪れたのは 1995 年の 7 月でした。

親友ハラムが 1833 年に突然、死去したことを契機に書かためて発表したのが、代表作である叙情詩集『イン・メモリアム』(In Memoriam, 1850) です。テニソンの魂の遍歴とも言えるこの詩集には、ハラムと共に過ごしたトリニティ・カレッジでの思い出も描かれています。1850 年には、ワーズワースの死後、その跡を継いで桂冠詩人になりました。イギリスの国民詩人として人々に尊敬されたテニソンは、1892 年に 83 才で亡くなり、ウエストミンスター寺院 (Westminster Abbey) の詩人のコーナーに埋葬されました。

前期には、英米詩のゼミを担当しましたが、その中で「鷲」(“The Eagle,” 1851) を読みました。鷲の特徴と生態を見事に捉えたこの詩は、6 行という短い作品でしたが、学生たちには、深い印象を残したようでした。

留学生座談会 2006

英語・英語圏文化専攻 教員
北川 宣子・前田 隆子

派遣奨学生として 1 年間の留学を終えてこの夏に帰国した 2 年生を囲み、今年も座談会を開きました。今回はイギリス (Chichester College) から帰国した安倍幸子さん、新井紀子さんとアメリカ (Johnson County Community College (以下 JCCC)) から帰国した恩田奈々さんと古澤菜穂さんにそれぞれの体験談を聞きました。

教員: 皆さん、お帰りなさい。今日はまず留学して良かった点からお話ください。

古澤菜穂

(以下 NF): 前半は勉強が大変で留学生生活をエンジョイする余裕がありませんでしたが、後半には英語力もつき楽しむことができました。特に International Club 主催のパーティーや泊りがけの行事で良い思い出ができました。また、単位取得コースのコミュニケーションの授業ではアメリカ人学生に混じって様々な発言する機会をいただき、大変勉強になりました。

新井紀子

(以下 NA): 今まで地図上でしか知らなかった地域 (例えばナイジェリア) の人々と交流できたことは一番の喜びでした。また国によって異なる body language やスペイン語なども覚えることができ、おもしろかったです。

安倍幸子

(以下 YA): 何より学校での勉強が充実していましたし、様々な人々と出会えたことがよかったです。また、私がいた Chichester の町の英国人は日本人よりも近所付き合いが親密でホームパーティに何度も招待されました。駅に行くとき必ず話しかけられたことも印象に残っています。

恩田奈々

(以下 NO): 私にとって、ホストマザーのキャロルに出逢えたことが一番留学してよかったことです。英語力を上げることができたり、多くの友人ができてきたことも自分にとって大切な財産になりましたが、キャロルに出逢って、本当に多くのことを学びました。私も彼女のように強く明るくなりたいと思えるほど、尊敬できる存在となりました。

教員: では、皆さんが苦労したことは何ですか？

NF: 車がなかったので、移動に苦労しました。友人ができてからは友人に乗せてもらうことができましたが、やはりアメリカは車社会ですね。

NA: スペイン人の留学生が多かったのですが、彼らの発音が慣れるまでは分かりづらくて苦労しました。

YA: 一度体調を崩し、救急車で病院に行ったことがあります。でもみんなが親切にしてくださり、人々の温かみを知ったので結果的には苦労ではありませんが。

NO:一番印象に残っているのは、最初にホストファミリーを替えたことです。家の中の環境が良くなかったので、替わりたいと伝えました。その時は申し訳ない気持ちでいっぱいでしたが、今は正直に自分の気持ちが伝えられたことはよかったですと思っています。

教員:皆さんは苦勞より良かったことの方が多いようなので安心しました。では、最後に留学希望の在学生たちにメッセージをお願いします。

NF:JCCC には日本人留学生は多くない上、勉強もハードなので、英語漬けの生活を送ることができ、その分、必ず成長します！是非 JCCC に留学をお勧めします！

NA:一年間留学できる機会はそうあるのではないと思うので、貴重な一日一日を大切に過ごすことが大事だと感じました。

YA:Cambridge の試験や NVQ(National Vocational Qualification) の資格試験のために皆、熱心に勉強していました。私たちも NVQ の試験を受ける機会がありました。またインターナショナルの行事も多いので積極的にに関わり、参加することですね。そうすれば人と人の輪が広がって、留学生活がより充実すると思います。

NO:留学する前は、ホームシックになったり途中で諦めて帰ってきてしまおうのではないかととても不安でした。しかし、実際には一度もホームシックになることもなく毎日楽しく過ごせて、今では留学して本当によ

かったと思っています。日本で一年間勉強するのは過ごした時間の濃さが全く違うと感じました。是非素晴らしい経験をしてください！

教員:ありがとうございました。皆さんの留学の成果をこれからの授業の中で見せていただくのが楽しみです。



恩田さんと古澤さん
(左前列・後列):
JCCC の仲間と一緒に

安倍さん(前列右):
バッキンガム
宮殿正面広場にて



留学中に Chichester College が Queen's Anniversary Prize を受賞し、日本人留学生代表として安倍さんが選ばれました。

先生が学生だった頃

このコーナーでは、カリタス女子短大の先生方がどのような学生時代を送ったのかを、学生によるインタビュー形式でお届けします。今回のゲストは、石野郁也先生です。インタビュアーは、英語・英語圏文化専攻 1 年の鶴嶋望さんです。

Q:石野先生がご卒業された大学・学部専攻を教えてください。

A:早稲田大学教育学部の社会科地理歴史専修です。

Q:学生時代に勉強やサークルなど夢中になったものはございますか？

A:大学に入学後すぐに地理学研究会に入ったものの、自宅通学 2 時間のため、なかなか専念できず、半年後に 2 年上の先輩から呼び出しを受け、引導をわたされました。(しかし、その先輩とは神奈川県教員採用試験の二次試験会場で再会し、それ以降は同じ県立高校の地理仲間として教材開発や地域研究などを一緒に行いました。もう 40 年近い付き合いです。)

夢中というほどではありませんが、旅が好きでしたので、アルバイトをしては友人と北海道から九州まで各地を貧乏旅行しました。特に印象深いのは、三島由紀夫の「潮騒」の舞台となった伊勢湾に浮かぶ神島の方々と交流です。人情が深いです。

Q:先生から見て今の学生をどのように思われますか？また、先生の時とどこが違うと思われますか？

A:1960 年代の若者は、少しでも早く一人前の大人になりたいという願望が強かったですね。何事にも「背伸び」をしたものです。国際問題や社会状況に関心が強く、自分の将来を考えて資格取得を目指すなんてことは、自己中心的・利己的な生き方として仲間から否定される風潮がありました。社会の矛盾を解決するには、どうすべきかを真剣に論じ合う時代でもありました。



教え子と一緒に石野郁也先生

今は、学生への学びの支援システムがきめ細かく整えられ、学生たちも一生懸命勉強するようになりました。ただ、どこか思考や行動が「自己中心」で、周囲の者や世界へ目を向けようとする視線が弱いような感じがします。

Q:先生が教師になろうと思ったきっかけは何ですか？

A:父親がかつて小学校の教師であり、たびたび「教師ほどやりがいのある仕事はない」と聞かされていました。また、私が小学校 6 年生の時の担任が、とても教育愛に溢れる情熱的な方でした。父の言葉を改めて実感することになりました。

Q:その長い教師生活の中で心に残っていることは何ですか？

A:卒業後、若くして病気で事故で亡くなってしまった教え子のことがよく思い出されています。今でもたくさんの教え子との交流があります。上は 50 歳代から下は 30 歳代までです。卒業後、一度も会っていない教え子が今どうしているか気になりますね。

Q:最後に学生に一言メッセージをお願いします。

A:ぜひ人生を長いスパンで見てください。今は人生 80 年です。自分の大切なものを 10 年間続けてみてください。必ず道が拓かれてきます。石の上にも 10 年です。「頑張りないうけど、決して諦めない」ことこそが、充実した人生を獲得する秘訣なんです。



映画「フラガール」 オフィシャルHPより
(<http://www.hula-girl.jp/download.html>)

現在、「フラガール」という映画が全国で上映されています。この映画は、今から40年ほど前の福島県いわき市の炭鉱の町が舞台となっており、石炭産業の衰退にともない勢いを失った町が、復興をかけてリゾート施設を建設した実話に基づいています。炭鉱で湧き出る温泉を利用したその施設は、一種のテーマパークであり、南国のリゾート気分を演出するため、「ハワイ」を創り出すことが試みられました。映画の中には、椰子の木を輸入して植え込むシーンもあり、「ハワイ＝椰子の木」というハワイに対して人びとが抱くイメージが体现されていますが、同時に、この映画のテーマである「フラガール」の養成に力を注ぐ様子から、人びとの中に「ハワイ＝フラダンス」というイメージが強かったこともうかがえます。

当時「フラダンス」と称されたこのダンスも、現在では「フラ」と呼ばれることが多くなりました。「フラ」という言葉そのものに、フラを踊る

こと、すなわちダンスの意味合いがあるためです。ハワイ諸島から太平洋を越えて日本に入ってきたその踊りに親しむ人は、現在40万人に上るとされるほど、近年日本に浸透してきました。フラは、二種類に大別され、メレと呼ばれる詩やハワイ独特の楽器に合わせて踊る古典的なフラ・カヒコと、ウクレレやギターなど欧米の楽器に合わせて踊る現代的なフラ・アウアナがありますが、日本で広く知られているのはアウアナの方だといえます。

フラが生まれたハワイ諸島は、1898年にアメリカに併合され、現在はアメリカ50州の中のひとつですが、長い間王によって統治された国でした。欧米との交流が始まるまで文字を持たなかったその社会において、クム・フラという踊りの師によって、人から人へと伝えられたとされています。身体の動きによって、愛や喜び哀しみなどの感情を表現し、宗教的な聖なる意味合いをも持ちました。白人による統治が始まってからは、「野蛮」な踊りと解釈されて衰退していったフラは、ハワイの観光地化にともない、ハリウッド映画などのメディアを通じて「官能的」な踊りとして描かれたりもします。現代のように、伝統も重視したフラが尊重されるようになったのは、アメリカ公民権運動の影響を受けてマイノリティが権利を主張するようになった1960年代以降のことでした。

映画「フラガール」にみられる「ハワイ＝フラダンス」という構図は、ハワイの観光地化の産物といえるかもしれませんが、そのイメージにしたがって縁もゆかりもない福島の人たちが奮闘しているところは興味深くもあります。この映画は先日、第79回アカデミー賞最優秀外国語映画賞部門の日本代表作品として選ばれました。アメリカの人びとにどのように評価されるのか楽しみなところです。

サークルの輪

英語・英語圏文化専攻 教員
前田 隆子

今回紹介するサークルは、「カリオンクラブ」です。顧問の浅井先生にインタビューしました。カリオンとは、「カリタス音楽クラブ」の略称ですが、ヨーロッパで中世から使われているベルの「カリオン」にもかけています。専攻を問わず、音楽好きの学生が集まり、現在あざみ祭に向けて練習に励んでいます。あざみ祭では、トーンチャイムで「80日間世界一周」やトランペットとピアノのアンサンブルで「オーバー・ザ・レインボー」などを演奏する予定です。ぜひ皆さん聞きにいらしてください。(10月22日(日)11:00~@体育館)

Kaleidoscope 第23号はいかがでしたか？ 皆さまのご意見・ご希望・ご質問など、お気づきの点を maeda@caritas.ac.jp までお寄せください。

2006年10月10日発行
発行責任者：北川宣子
編集協力：東京工科大学
コンピュータサイエンス学部 堀 竜太郎

カリタス女子短期大学

Caritas Junior College

〒225-0011

横浜市青葉区あざみ野 2-29-1

Tel:045-901-5133

Fax:045-901-5066

URL: <http://www.caritas.ac.jp/english>